郷土研究
伊丹公論
復刊
第36号
通巻 55 号
年３回発行
発行　伊丹市立図書館ことば蔵
〒664-0895
伊丹市宮ノ前3-7-4
TEL 072・784・8170
編集　伊丹公論編集委員会
伊丹公論のバックナンバーはこちら

出会い花咲く学びの場
きららホール開館20周年

伊丹市立北部学習センター（愛称：きららホール）が、今年4月で開館20年を迎える。

きららホールの職員の皆さん＝きららホール提供

地域の生涯学習の拠点として

平成の初め、伊丹市北部では、市民の活動拠点となる生涯学習施設の整備を求める気運が高まっていた。

こうした動きを受け、伊丹市は平成13年（２００１）11月、中高生を含む地域住民などで構成された「（仮称）伊丹市立北部拠点施設建設懇話会」を設置。同懇話会の提言に基づき、平成16年4月、きららホールが伊丹市北部の生涯学習拠点施設として誕生した。

一方で、平成15年9月の地方自治法改正により施行された指定管理者制度のいち早い導入に向け、同懇話会のメンバーが中心となって「NPO法人まちづくりステーションきらめき」を設立。翌年4月「きららホール」は、伊丹市で最初の指定管理者施設としてスタートした。愛称の「きららホール」は、市民から募った95件の中から、「生涯学習の拠点として、ここで活動する市民がキラキラと輝けるように」という願いが込められて選ばれた。以降、同ホールは20年に渡って地域住民が中心となって運営する「人々が出会う交叉点」として、多彩なイベントや活動を通じ、市民同士の交流や学びを深めてきた。

大根引きを楽しむ子どもたち

きらら夏祭りの様子

きららホールってどんなところ？

きららホールは、公民館・図書館・児童館の3つの機能を持った複合施設である。地下1階から地上3階建てで、地下にはダンスの練習や、個人の楽器練習、バンド練習などに使用できる音楽室が3室、1階には、図書館北分館と伊丹市北支所が配置されている。2階には、保護者と幼児が自由に遊べるゆうぎ室やにゅうじ室、自習や読書ができる学習室や会議室があり、3階にはピアノの発表会や講演会、軽スポーツに利用できる160人収容の多目的ホールのほか、趣味・サークル活動として利用できる創作室や調理室、和室など、様々な目的に応じて利用できる。

特に、2階のゆうぎ室は遊び場だけではなく、子育てについての悩みや疑問に応えるため相談員を配置するなど、子育て支援の場としても活用され、毎日多くの親子でにぎわう。2階の談話コーナーでは、放課後、多くの子どもたちが来館し、宿題や読書、オセロゲームやけん玉などに興じる姿が見られ、子どもの居場所としてすっかり定着している。

講座やイベントも充実

きららホールでは、0歳～高齢者まで幅広い年齢層に対応した様々な講座や事業が1年を通じて開催されている。

例えば、子育て支援のための「ベビーマッサージ講座」や子ども向けの「おはなし会」、「小学生絵画教室」、「将棋クラブ」、「英会話」に「ダンス教室」など、子どもの成長段階に合わせた様々な講座が用意されている。

夏休みには、学校の自由研究にも活かせる「夏休み科学実験教室」や、石けんや紙芝居、お弁当を自分でつくる講座などが開催され、毎年人気が高い。

一般向けには、趣味や教養を学べる多彩な講座も充実している。「実用書道」や「水彩色鉛筆」、「フラワーアレンジメント」などの芸術系講座。韓国語、英会話などの語学系講座。「楽しいうた講座」や「オカリナ」など、音楽関連の講座。健康関連では「フラダンス」や「ヨガ」、「エアロビクス」、自己治癒（ちゆ）力をうながす健康体操「自彊（じきょう）術」や「太極拳」など、いずれも利用者が満足できるメニューが揃っている。

また、「落語会」や「ジャズフェスティバル」、「元タカラジェンヌによるレビューショー」など、多くの方々が楽しめるイベントも開催している。

そして、開館20周年を迎える令和6年11月には、記念イベントを開催予定だという。是非とも期待してお待ちいただきたい。

マスコットキャラクターのきらりんとベイベイ

多様な地域連携を展開

きららホールでは、市域北部の拠点施設として地域性を活かした事業を展開し、連携を強めている。

同ホールの二大イベントである、5月の「こどもまつり」、夏休みの「きらら夏まつり」では、地域の自治会・協議会、伊丹北高校や中学校、各種の団体などと協力しながら、約千人を超える子ども達が参加するイベントとして定着している。

また、地域の農家やコミュニティ協議会と連携した「サツマイモやジャガイモ堀り」、「大根引き」などの野菜の収穫体験、地元の鴻池商工会と連携・協力した「清酒発祥の地～鴻池～」にちなんだ「日本酒学講座」も開催している。

これから

開館当初からスタッフとして働く大池津由美副館長は、「20年前、懇話会で提言された『地域住民に親しまれ、利用しやすい施設』。そして『誰もが、そうだ！きららに行こう！』が、合言葉になるような施設にするため、地域の有志が、無我夢中で運営を始めた。今後も、次の世代にその思いを引き継ぎ、いつまでも市民に愛される『きららホール』が続いてほしい」と、熱く語ってくれた。

地域の多くの人々が集い、交流し、学び、体験できる施設として、今後もオリジナリティ溢れる事業が展開され続けるに違いない。

（交流事業担当）

伊丹市立北部学習センター（きららホール）の歩み

平成11年 9月	北部地域拠点施設整備を位置付けた第4次伊丹市総合計画基本構想が定まる
平成14年 2月	（仮称）伊丹市立北部拠点施設建設懇話会が提言を提出
平成15年11月	「特定非営利活動法人まちづくりステーションきらめき」（以下「きらめき」）設立
平成15年12月	北部学習センター条例制定
平成16年 3月	北部学習センターの指定管理者として「きらめき」の指定を議決
平成16年 4月	**4日、伊丹市立北部学習センター（きららホール）開館**
平成17年12月	図書館北分館の指定管理者として「きらめき」の指定を議決
令和 2年 2月	第72回「優良公民館文部科学大臣表彰」受彰
令和 2年11月	伊丹市市制施行80周年記念自治功労賞受賞
令和 4年12月	北部学習センター及び図書館北分館の指定管理者として「きらめき」の5回目の指定を議決

「郷土研究伊丹公論」は、私立伊丹図書館を開設した小林杖吉（筆名「丹城」）が、昭和11年（1936）1月20日に創刊し、19号まで発行された地域紙。ことば蔵では、伊丹公論を73年ぶりに復刊し、伊丹の歴史・文化を全国に発信するため、市民と共に発行しています。

第11回
日本一短い
自分史

「とんでもないものを盗まれた！」

大賞に伊丹市の中島さん

ことば蔵はこのほど「あなたと推し」をテーマに募集していた「日本一短い自分史」の大賞に、伊丹市の、中島瑶子（ようこ）さん（38）の自分史「とんでもないものを盗まれた！」を選んだ。

日本一短い自分史の募集は平成25年度にスタート。11度目となる今回は10月1日から募集し、市内外から75作品の応募があった。審査員は伊丹大使の坪内稔典・市立伊丹ミュージアム名誉館長、湯浅俊彦・追手門学院大図書館長、中周子・田辺聖子文学館長の3人。

秀作入賞者は、伊丹市の加藤八重子さん(73)、名古屋市の山田明日美さん(18)、札幌市の田島栞さん(25)、大阪府摂津市の岬和美さん(74)の4人。大賞作品の全文は以下のとおり。

ルパンが登場する舞台のポスターと中島さん＝大阪市で

◇　◇

アルセーヌ・ルパン。いわずとしれたフランスの大怪盗である。

当時、幼稚園児だった息子と読むつもりで手に取った『10歳までに読みたい世界名作』シリーズがきっかけで、私は瞬く間にルパン作品に夢中になった。要約された物語でもこんなに面白いならばと、子供向けにリライトされた小説、そして完訳本へと手が伸びるのに、そう時間はかからなかった。

ルパンはスポーツ万能で変装の名人、女性や子供に優しく、いたずら好きで負けず嫌い。車に乗ればスピード狂、実は親日家という一面も。有能な部下達を従え、鮮やかな手口で財宝を盗みだす。なんて面白い男だろう！

折しもコロナ禍、遠くに出かけられない私は、『地球の歩き方』を読みふけり、インターネット上でルパンゆかりの土地を巡った。ベル・エポック時代の街並みに興味がわけば、図書館に通い、肩が外れそうなほどに重い写真集を何冊も借り集めた。読書に飽き足らず、甘党のルパンが食べたかもしれないブルターニュのキャンディを買い求め、自宅のキッチンではクロワッサンやメレンゲシャンティ、ふだんなら絶対に自作しようなどと思わない料理に勤しむ日々。おかげで、暗澹（あんたん）たるコロナ禍にあっても私はちっとも退屈を覚えることがなかった。ルパンに関する書籍やDVDが、書棚をじわじわと占めていく。いつしか、彼と出会って四年の月日が流れていた。

『やつはとんでもないものを盗んでいきました。あなたの心です』

ふと、ルパン三世の映画で印象的な銭形警部のセリフが思い出される。まるで今の私に向けられた言葉のようではないか。ただしルパンは私から心だけでなく、お金や睡眠時間も盗んでいったが……。盗まれた心は、未だ彼の手中。ルパンを起点に、私の興味はあちこちに伸びていく。未知の扉を次々と開いてくれる怪盗紳士。ここまできたならばいっそ、とことんまで彼を追いかけてみたいと思う。

◇　◇

中島さんは受賞後「世界中で愛されているアルセーヌ・ルパン。連載から百年以上が経った今も、彼が登場する舞台や物語はぞくぞくと生み出されています。今回の受賞の喜びを新たなエネルギーにかえて、これからも彼を追い続けていきたいです」と話してくれた。

（交流事業担当）

郷土史こぼれ話 35

令和6年 能登半島地震と七尾

「津波がきます。早く高台に逃げて!!」のテレビ画面。思わず、阪神・淡路大震災を思い出した。平成7年（1995）1月17日午前5時46分、兵庫県を中心に激しい揺れに襲われた。あれから29年経った、令和6年（2024）1月1日午後4時10分頃、正月を楽しむ日本列島に地震が発生した。津波に地震が重なり、能登半島はパニックになった。その中に七尾市があった。思い出の街だ。太平洋戦争後、引揚げて小学校6年生のとき、父の転勤で七尾市民になった。わずか1年の在住であったが11才の愛着の街だ。

昭和21年七尾市立袖ケ江小学校6年人組の集合写真＝筆者提供

阪神淡路大震災発生時刻で止まった時計

友達はどうなっただろう。新聞の行方不明、死亡欄を手で押さえ安否確認をする毎日。もどかしいが分らない。

能登半島の夕陽を見ながら父と泳いだ。上杉謙信ゆかりの地らしく、クラスは天・地・人に分かれ、人組の田中先生は、名作『二十四の瞳』の大石先生のようだった。「貴方（あなた）たちが日本を背負って立つのよ」と口癖のように言われた。

七尾では初めてベースボールを観て夢中になった。オーバースローの七尾セメントの投手、「野球少年」という雑誌。発行日に手にするまでがもどかしかった。記事の中にアナウンサーが担当した「巨人・阪神の誌上熱戦放送」があった。それをクラスで熱演した。「放送聞いてる見たいや」と云ってくれたのが嬉しかった。NHKの「カムカム英語」を学芸会で歌った。貸本屋にも毎日通った。バロネス・オルツィの「紅はこべ」はお気に入りだった。

親友だった井上君は、交流を続けたが音信が切れた。担任の田中先生。家が近かった篠田君。高井君。初恋の宮下さん。写真を交換した古崎君。劇を一緒にした高木さん。優等生の小野君。誌上放送を褒めてくれた高橋君。色々親切にしてくれた不破さん。能田さん。そして、七尾を離れる前に、書道セットを届けてくれた中沢さん。

クラスメートのみんな、無事であってほしい。再会したい人ばかりだ。

（郷土史研究家 森本啓一）

伊丹俳壇

「春の川」坪内稔典　選
（市立伊丹ミュージアム名誉館長）

最優秀賞

さらさらと青い動脈春の川
平　きみえ（伊丹市）

青い山脈を連想させる「青い動脈」という表現が効果的です。春の川から命が育って広がって行く感じがします。その命の音が「さらさら」です。

優秀賞

翌日は春の川にてお引っ越し
噂野アンドゥー（伊丹市）

歯医者から自転車を漕ぎ春の川
友常甘酢（横浜市保土ケ谷区）

春の川水面に固き意志の顔
八島　和也（伊丹市）

春の川ごきげんようとヌートリア
戸川冨士子（大阪府豊中市）

吊橋は十二人まで春の川
渡辺　啓子（神戸市西区）

伊丹歌壇

「2023」尾崎まゆみ　選
（「玲瓏（れいろう）」編集委員。神戸新聞文芸短歌選者。現代歌人協会会員）

最優秀賞

戦士らを乗せたパレードバスを待つ　2023年こよなく平和
渡辺　啓子（神戸市西区）

2023年への思いとして、タイガースとオリックスの選手を戦士とし背後に戦争の影を見せ、優勝パレードそのものではなく、平和の中でしか生まれないパレードを待つ心を見せてくれた短歌を。「こよなく平和」が未来への祈りのようで沁みる。

優秀賞

まだ生きていいのかなどと我が脳に問ふてるやうな手術の続く
小田　慶喜（明石市）

2以外の偶数は素数にあらず算数支援の姉に説きおり
近江菫花（大津市）

第九波についに呑まれて父逝きぬ四年外食をしなかった父
芍薬（千葉市美浜区）

次々と開く傷口手で押さえ血を止めていた2023
友常甘酢（横浜市保土ケ谷区）

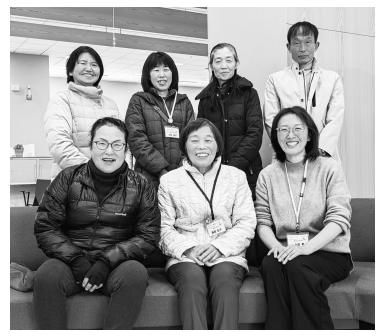
この短歌2023年詠むとして掲載の日は2024年
噂野アンドゥー（伊丹市）

次回の兼題は、俳壇は「つばめ」、歌壇は「龍」とします。応募は1人各1作品、自作未発表作品に限る。応募締切は4月15日（必着）。最優秀賞には図書券千円を進呈。下の二次元コードを利用すると、スマートフォンからも応募できる。問い合わせは、ことば蔵へ。

いたみで ボラ活!

食 de つながろ

「もったいない」を「ありがとう」に



メンバーの集合写真

私たちの生活に欠かせない「食」をテーマに、地域で支援の輪を広げているボランティアグループがある。「食deつながろ」(以下「同会」)は食品ロスの削減を目指し平成28年(2016)から8年にわたって伊丹市で活動を続けている。同会の主な取り組みは「食を繋ぐこと」。家庭の余剰食品や行き場を失った食材の寄付を募り、こども食堂や福祉団体など、食材の支援が必要な場所へと分配する「フードドライブ」を伊丹市や企業と協働している。

同会は、公民館の市民講座受講生らによって結成された。活動を始めた当初は、市内の様々なイベントにブースを出展し、地道に食材の寄付を募っていた。しだいに他の市民団体との交流が増え、環境クリーンセンターやごみ減量・資源化担当(現減量推進課)など、市の関連部局とも交流が生まれた。

転機が訪れたのは活動4年目の平成31年。市から食品ロス削減を目的とした公募型協働事業の説明があり、これに関心を持った団体と共同で「ストップ!!食品ロスいたみ」を立ち上げた。

市との協働によって公共施設や支所・分室に新たな回収拠点が設置され、市民は手軽に食材を寄付できるようになった。また、SDGsの観点から企業や団体・学校などでのフードドライブ実施の輪も徐々に広がり、市内の拠点回収に寄せられる食材は月に100㌔を超える。集められた食材は市内の備蓄倉庫に集積され、同会のメンバーが分配先に渡しやすいように選別し、届けている。生活が困窮し電気やガスが使えない家庭では缶詰やパックご飯、α化米が、母子寮ではお菓子や米、調味料、レトルト食品が喜ばれる。渡し先が求めているものを見極め、新たな食品ロスを生まないよう、食材選びには工夫を凝らしている。

メンバーは、イタミ朝マルシェでの食品寄付ブース出展に合わせ、参加者から「もったいない」を減らす工夫を聞くなど、人とのつながりや交流をいつも楽しみにしている。また、「伊丹で出た食品ロスは伊丹で再配分する。そうすれば食品の無駄も運搬コストの無駄も削減できる。地域循環型の食糧支援・活用モデルが伊丹市でなら実現できるはず。今後も行政や福祉団体などと共に、必要な方へ食品を届ける仕組みを考え、食を通した地域の支えあいの輪を広げたい」と展望を語った。

市では、市内各所での拠点回収において、フードドライブを実施。対象食品は未開封かつ賞味期限が2ケ月以上残っている常温保存可能なもの。活動メンバーも随時募集している。詳細は二次元コードから。

酒を醸す、酒をたしなむ

市立伊丹ミュージアムで 旧岡田家住宅・酒蔵築350年記念展示

江戸時代、多くの酒蔵が立ち並び、往来にはたくさんの人々が行きかいにぎわった伊丹の町。伊丹で造られた良質な酒は「伊丹諸白」「丹醸」などと特別な名前でもてはやされ、江戸で人気を博した。

旧岡田家住宅・酒蔵は、そんな伊丹の町の中心に延宝2年(1674)に建てられ、昭和59年(1984)まで300年以上もの間、酒造りが行われていた。建築年代の明らかな酒蔵としては国内最古で、江戸時代に栄えた伊丹の酒造りを今に伝える重要な遺構であり、平成4年(1992)に国の重要文化財に指定された。

令和6年(2024)4月、旧岡田家住宅・酒蔵が建立されてから350年の節目を迎える。それを記念し、旧岡田家住宅・酒蔵について、また伊丹での酒造りについて紹介する企画展が市立伊丹ミュージアムにて開催される。

展示の目玉は江戸での伊丹酒販売風景を描いた「高崎屋絵図」(文京ふるさと歴史館蔵)＝**写真**＝と、江戸時代に京都の居酒屋で伊丹酒がたしなまれていたことがわかる「都万太夫座歌舞伎図屏風」(早稲田大学坪内博士記念演劇博物館蔵)。このうち「高崎屋絵図」は伊丹市で初公開。江戸の酒仲買兼小売業者である豪商・高崎屋の店先に描かれるのは、にぎやかな江戸っ子と、「白雪」や「老松」、「剣菱」に「菊」、そして旧岡田家住宅・酒蔵で醸造されていた「松緑」など多種多様の伊丹酒。いまでもなじみ深い酒銘が盛りだくさんだ。高崎屋からは、板橋宿の旅籠屋に「白雪」や「松緑」を卸していた記録もあり、絵画や古文書から、江戸で、伊丹酒が愛されていた情景が浮かび上がる。

「旧岡田家住宅・酒蔵築350年記念　酒を醸す、酒をたしなむ」展は市立伊丹ミュージアムにて4月12日(金)～6月2日(日)まで開催。観覧は無料。お問い合わせは同館(TEL 072・772・5959)まで。関連行事も種々開催予定。詳しくはホームページへ。

(市立伊丹ミュージアム)

郷土 土産品 紹介

笑顔と「おいしい」で地元を元気に!

Kitchenあっちゃん

自家製スパイスカレー、創作フレンチ、彩り鮮やかなお惣菜自家製パンやタルトなどのスイーツが堪能でき地元住民を中心に人気を集めている「Kitchenあっちゃん」。オーナーシェフの中西厚彦さん(61)＝**写真**＝は、初めてフランス料理を見た子どもの頃の感動を原動力にフランスへ渡り修行を積んだ。帰国後、フランス料理店や産院のお祝いフレンチ料理人として腕を振るっていた。その後、コロナ禍を機に独立を決意。美味しいものを作って喜んでもらうことに人生の全てをかけてきた中西シェフは、これまでお世話になってきた伊丹のまちを「おいしい」で元気にすると心を決め、令和2年(2020)8月に同店をオープンした。店名の「あっちゃん」は愛称だ。地域のイベントへの出店や、子ども食堂の発起人として調理を担当するなど、コミュニティ料理人として活躍している。

おすすめの土産品には、ベーグルなどの自家製パンや、ナッツとドライフルーツがたっぷり入ったプレミアムパウンドケーキなどがある。季節のフルーツや食材によって日替わりで楽しめるタルトやケーキも魅力の一つだ。お惣菜セットのテイクアウトも人気である。ぜひ店内でもスパイス豊かなカレーや創作料理の数々を味わってほしい。

(KUMI)

予約や価格などの詳細情報は、LINE公式アカウントから。定休日は月曜日の夜と火曜日。営業時間は午前11時～午後3時、同5時半～10時。

伊丹市昆陽東6―8―47
TEL 072・714・2395

老舗探訪

丸美食堂

伊丹市中央1丁目8-3
TEL072-773-0401

二人三脚で店を切り盛りする内藤さん夫妻

「おおきに。ありがとう」「ごちそうさま。ありがとう」。飲食店が軒を並べる阪急伊丹駅東の「ひがし商店街」。三軒寺前広場近くにある昔ながらのお食事処「丸美食堂」に、明るい感謝の言葉が飛び交う。

豊富なメニューがずらりと書かれた店頭の白板が目につく。日曜の昼下がり。青いのれんをくぐって店に入る。4人掛けテーブル席が6つ。ほぼ満席だ。卓上にメニュー表はなく、安くて多彩な「庶民の味」が壁に貼ってある。腹の虫が鳴く。何を注文しようか迷う。

昼食の一番人気はサービス定食(日替わり。平日のみ)で、500円のワンコイン。店先にケース入りで置かれており、通行人を店内に誘う。ショーケースには卵焼きや冷奴などの惣菜が並ぶ。常連客はご飯とみそ汁を注文し、お好みの小鉢を取り出して「マイ定食」を作って空腹を満たす。

開店から約45年。2代目店主の内藤修さん(58)が調理に腕を振るい、妻の礼子さん(58)が接客を担う。「徹底して安くて早くを第一に」がモットー。「これからも地域一番の安さを目指します」と修さん。懐にやさしく、胃袋にうれしいレトロな大衆食堂である。

ちなみに隣の立ち飲み店「丸美」は礼子さんの父、橋本英世さん(82)が経営している。

麺類はかけうどん・そばが300円から。焼き飯450円、オムライス650円など。丼物は玉子丼550円、親子丼、カツ丼などが600円。定食はハンバーグ、唐揚げ、カキフライなどが650円、焼き肉は750円。

営業時間は午前9時半～午後3時、同5時～9時(定食類は午前11時から)。木曜定休。

(奥山正弘)

現代人物風景

心の繋がりを大切に

イラストレーター 林やよいさん（62）

子育て情報誌「いたみすくすくぶっく」の『すくすくちゃん』、全国高等学校なぎなた選抜大会のマスコットキャラクター『心薙ちゃんと薙幸くん』、そして、本紙の4コマ漫画。伊丹市の施設や冊子を探すと、様々な場所で林やよいさんのイラストが登場する。イラストレーターとして活躍する林さんだが、ここに至るまでに様々な転機があったという。

漫画家を目指した学生時代

子どもの頃から、絵を描くことが大好きで、将来の夢は少女漫画家だった。大学では漫画研究会に所属し、原稿を出版社に持ち込み、賞をとったこともあった。しかし、物語を考えるという壁にぶつかり、夢を諦めた。卒業後は伊丹市の職員となった。

就職後すぐは仕事に追われ、イラストからは遠ざかった。再度描くようになった転機は当時の市長との面談で、「絵を描くのが得意なので、広報に挿絵を載せてみたい」と話したことだ。その希望が通ったのか、広報伊丹の作成を担当するようになった。紙面レイアウトの作成が主な仕事ではあるが、写真がないイベントのPRのためにイメージイラストを描くなどした。

子どもの成長をイラストに

市役所で約7年働いた後、子育てに専念するため退職。イラストからも離れた。第2の転機は娘の優梨亜さんだ。

優梨亜さんは生後5カ月で脳性まひと診断された。赤ちゃんは両手を合わせたり、足をつかんだりして、手足の場所や距離感を脳に書き込み、体の動かし方を学ぶ。しかし、優梨亜さんはそういった学習を誰かがサポートする必要がある。娘がゆっくりと成長していく過程を記録したいとイラストを交えた育児日記をつけるようになった。

実際の娘は表情が表に出にくいが、イラストにおこすときは、その時どう思っていたのかを想像して描いた。「イラストの中の優梨亜は笑っていて、イラストを通して娘の想いを感じていた」と話す。

イラストから広がる繋がり

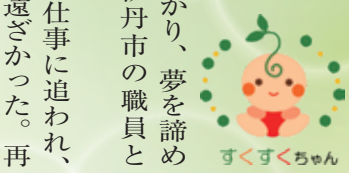
イラストが仕事となったのは、障がい者の母親の生活を飾らずありのままに描写した本に共感し、イラスト付きの感想を送ったことがきっかけだ。その後、出版社から依頼を受けて本の挿絵などを描くようになった。

また同時期に、地元で発行されていた子育て情報のミニコミ誌「チャチャねっと」に育児日記や挿絵を掲載していた。それを見た毎日新聞の記者から依頼があり、月に1回、子育て4コマを掲載することになった。現在は毎日新聞兵庫県版に月に1回「新くるまいすまいる～ゆりあ絵日記～」でイラストとコラムを連載している。

その一方、市役所を退職した後も同僚から依頼があり、時々キャラクターをデザインしたり、カットを描いたりしていた。するといつの間にか、市の情報誌やリーフレットの表紙を飾るようになったという。

「ことばを考えるのは難しいけど、ことばをイラストにするのは昔から得意だった。様々な人との繋がりを広げてくれた私のイラストが、次は誰かと誰かを結びつけられたらうれしい」と林さんは、はにかみながら話してくれた。（交流事業担当）

林やよいさんと娘の優梨亜さん　写真協力＝西田写真館



林やよい　伊丹市在住。毎日新聞兵庫県版にイラストエッセイ「新くるまいすまいる」連載中。

おにつらくん（いたみアピールプラン推進協議会のメインキャラクター）

心薙ちゃんと薙幸くん

元おかみの きまぐれコラム

緑ケ丘公園❀花ものがたり●

「梅林」を楽しめたひと時

伊丹市で最も古い昭和38年（1963）4月開設の緑ケ丘公園には、昭和57年から平成にかけ33年にわたり、梅林がありました。約50種、約400本の梅が、毎年2月から3月にかけて花が咲き、梅の名所として多くの市民が訪れていました。しかし平成24年（2012）7月、市内で栽培されていた梅の苗から「ウメ輪紋病」が確認されたため、伊丹の特産であった東野の南京桃や梅の苗木生産は中止されました。残念ながら、緑ケ丘公園の梅林からも同疫病の陽性が確認されたため、平成27年3月にすべて伐採されました。

桜の名所「桜の丘」へ

緑ケ丘公園の梅林跡地は市民の意見をもとに「桜の丘」に生まれ変わることになりました。

平成29年3月、市民により桜の苗木が植樹され、翌年度には、桜の育成管理を行う市民ボランティア「緑ケ丘公園桜の丘見守り隊」が設立され、現在、草刈り・施肥などの軽作業を月1回程度行っています。30種110本を超える丘の桜も、植樹から7年目を迎え、成長してきています。桜の名所となるまでにはまだ数年の歳月は必要ですが、現在も3月初めの河津桜に始まりソメイヨシノをはじめ、紅、白、黄緑など多種の桜の花を順次、楽しめます。桜が更に成長し花の見ごたえも増すようになれば、梅林の時とおなじように、花を愛でながら、お茶会や俳句会、屋台での販売などが開催され、賑わうことを願っています。

桜の名所づくりを目指し「緑ケ丘公園桜の丘見守り隊」では会員を募集しています。花や土いじりの好きな方や「桜の丘」に関心をお持ちの方は、市役所みどり自然課（TEL 072・780・3521）までお問い合わせください。

（平 きみえ）

▲47都道府県のお酒

昨年の忘年会で訪れた大阪のお店だが、ここがホントに楽しかった！コース料理の一つで箱を開けると白い煙があがって、浦島太郎の世界に迷い込んだよう♪料理名も「名物 玉手箱」。中には、お刺身などアテがぎっしり入っていて、それだけで大満足!!なのだが、他にも美味しい料理をお腹いっぱい、いただいた。

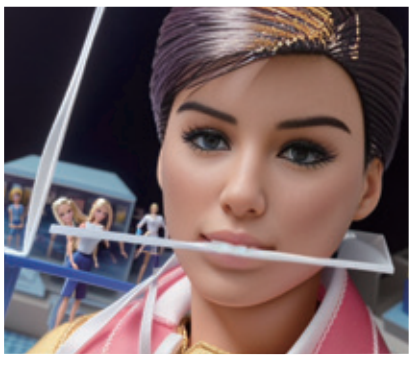
で、そのコースがさらに楽しいのは、47都道府県それぞれ一種類の日本酒メニューの中から飲み放題、となっていること。もちろん、1回の来店で47酒を制覇できるわけでなく、拙者も10府県程度で時間切れ（笑）

まんまとお店側の戦略にはまっているよな～と思いながら、やっぱりいつかは制覇することを目標にまた訪れることを決意した次第である。

▲あんぱんと日本酒

これも昨年12月の話だが、拙者が関わっているミュージアムのホールで「たしなみ講座～自分時間を楽しむ」を開催した。

あんぱんをこよなく愛されている、楽しい講師の講義のあと、第2部のトークセッションは「愛すべき日本酒とあんぱん」というタイトルで、講師とミュージアムを創設された酒造会社の社長との対談が行われた。

そして、第3部では市内で「台柿あんぱん」という、見た目も柿衛文庫の名前のいわれとなっている台柿（柿の実の形からくる呼び名で、底部に台があることからこう呼ばれている）のあんぱんと日本酒のコラボ。社長が「あんぱんには、このお酒を試してほしい」と思われた日本酒数種と台柿あんぱんを参加者の皆さんに楽しんでいただいた。あらためて、日本酒の味わい方の幅広さを感じた講座であった。

（ときわ 喜多）